

セルオートマトンの合成とリミットサイクルについて

九州産業大学基礎教育センター 石田 俊一 (Toshikazu Ishida)

Center for Fundamental Education, Kyushu Sangyo University

九州大学大学院数理学研究院 井口 修一 (Shuichi Inokuchi)

Faculty of Mathematics, Kyushu University

1 はじめに

セルオートマトン (CA) とは、内部状態を持つ複数のセルで構成される離散的な様相 $c \in C$ が、遷移関数 $F: C \rightarrow C$ に従って離散時間毎に変化する遷移系 (C, F) である。セルオートマトンは、非常に単純な構造をした計算モデルであるが、多様性に富み、かつ、複雑な挙動を示すことから、交通流などの社会、経済現象、様々な自然現象のシミュレーションなど、多くの分野で研究、応用されている。その中の 1 つに、1 次元 2 状態のセルオートマトンの遷移規則をうまく定義することで、最大周期 (2 のシステムサイズ乗一定数) のパターンを生成するセルオートマトンが構成できることから、ランダムパターン生成器への応用例がある。一様構造ではない、つまりセル毎に適用する規則が変わるハイブリッドセルオートマトンでは、研究が報告されており、最大周期をもつための必要十分条件 (遷移行列の特性多項式が原子多項式) [1] や、原子多項式から最大周期をもつセルオートマトンを構成する方法が提案されている [4]。一方、一様な構造を持つセルオートマトンでは、最大周期をもつセルオートマトンはいくつかしか知られていない [3]。しかし、ハイブリッドなセルオートマトンほどではないが、一様な構造のセルオートマトンの種類も非常に多く、その中に最大周期をもつセルオートマトンが存在すると思われるが、そのすべてを考察するのはほぼ不可能である。

本論文では、セルオートマトンの合成により新たなセルオートマトンを構成し、挙動の関係性を考察する。中でもセルオートマトンの合成が可換である組み合わせについて注目する。つまり、2 つのセルオートマトン $CA_1 = (C, F_1: C \rightarrow C)$, $CA_2 = (C, F_2: C \rightarrow C)$ に対して、遷移関数を $F = F_1 \circ F_2 = F_2 \circ F_1$ と定義したセルオートマトン $CA = (C, F)$ を構成し、 CA_1 , CA_2 と CA の挙動の関連について考察する。

2 セルオートマトンとその合成

セルオートマトンの定義は様々あるが、ここでは、論文 [2] の定義を用いる。

定義 1 G を群とする。有限集合 $V \subset G, V' \subset 2^V$ に対し、 $CA = (G, V, V')$ を G 上のセルオートマトンとし、 V' に関して、関数 $f: 2^V \rightarrow \{\phi, \{e\}\}$ を以下で定義する。 $\forall A \in 2^V$ のとき

$$f(A) = \begin{cases} \phi & (A \notin V') \\ \{e\} & (A \in V') \end{cases}$$

また、 $\forall X \in 2^G$ に対し、 $F: 2^G \rightarrow 2^G$ を $F(X) = \bigcup_{g \in G} gf(g^{-1}X \cap V)$ と定義する。このとき、 f を局所遷移関数、 F を大域遷移関数と呼ぶ。

次にセルオートマトンの合成を定義する。

定義 2 $CA_1 = (G, V_1, V'_1)$, $CA_2 = (G, V_2, V'_2)$ を G 上のセルオートマトンとする。このとき、合成セルオートマトン $CA_1 \diamond CA_2 = (G, V_1 \cdot V_2, V'_1 \diamond V'_2)$ を以下の様に定義する。

- $V_1 \cdot V_2 = \{v_1 v_2 \in G | v_1 \in V_1, v_2 \in V_2\}$
- $V'_1 \diamond V'_2 = \{X \in 2^{V_1 \cdot V_2} | \{v \in V_1 | v^{-1}X \cap V_2 \in V'_2\} \in V'_1\}$

合成に対し、以下の性質がある。

定理 3 [2] 大域遷移関数 $F_{CA_1}, F_{CA_2}, F_{CA_1 \diamond CA_2}$ に対し、

$$F_{CA_1} \circ F_{CA_2} = F_{CA_1 \diamond CA_2}$$

が成り立つ。

定義 4 C を様相の集合、 F を遷移関数とする。このとき $F^\infty(C)$ を以下で定義する。

$$F^\infty(C) := \{c \in C | \exists n > 0 \ c = F^n(c)\}$$

$c \in F^\infty(C)$ を F のリミットサイクル (LC) 上の様相と呼ぶこととする。

3 合成 CA の LC の周期

セルオートマトンの合成が可換となる条件はいくつか明らかになっている [6]。本論文では合成が可換となるセルオートマトンに着目し、そのリミットサイクルについて考察する。以後、特に断わらない限り、セルオートマトンの合成は可換であるものとする。今、セルオートマトン $CA = (G, V, V')$ は2つのセルオートマトン $CA_1 = (G, V_1, V'_1)$, $CA_2 = (G, V_2, V'_2)$ の合成で定義されているとする。すなわち、 $CA = CA_1 \diamond CA_2 = CA_2 \diamond CA_1$ であり、大域遷移関数も $F = F_1 \circ F_2 = F_2 \circ F_1$ を満たす。

補題 5 以下が成り立つ。

- $F(C) \subseteq F_1(C)$
- $F(C) \subseteq F_2(C)$

$c \in C - F(C)$ がエデンの圏 (GOE) 様相であるので、上記の補題より $C - F_1(C) \cup C - F_2(C) \subseteq C - F(C)$ となり、 $c \in C$ が F_1 または F_2 の GOE 様相ならば、 c は F の GOE 様相であることを意味する。

LC 上の様相の集合について以下の性質がある。

補題 6 以下が成り立つ。

1. $F_1^\infty(C) \cap F_2^\infty(C) \subset F^\infty(C)$
2. $F^\infty(C) \subset F_1^\infty(C) \cup F_2^\infty(C)$

証明

(1) $c \in F_1^\infty(C) \cap F_2^\infty(C)$ とする。すなわち、 $c = F_1^{n_1}(c) = F_2^{n_2}(c)$ なる $n_1, n_2 > 0$ が存在する。いま、 $F_1 \circ F_2 = F_2 \circ F_1$ であるので、 $F^{n_1 \times n_2}(c) = (F_1 \circ F_2)^{n_1 \times n_2}(c) = F_1^{n_1 \times n_2}(F_2^{n_1 \times n_2}(c)) = c$ となり、 $c \in F^\infty(C)$ である。

(2) $c \in F^\infty(C)$ とする。すなわち、 $c = F^n(c)$ なる $n > 0$ が存在する。いま、 C は有限集合であるので、 $n \times m > \|C\|$ なる整数 m をとることができる。 $c = F^{n \times m}(c) = F_1^{n \times m}(F_2^{n \times m}(c)) (= F_2^{n \times m}(F_1^{n \times m}(c)))$ であるので、 $c \in F_1^\infty(C) (c \in F_2^\infty(C))$ である。($t > \|C\|$, $\forall c \in C$ に対して、 $F^t(c) \in F^\infty(C)$ である。) □

この補題は $c \in C$ が F_1 の LC 上の様相であり、かつ F_2 の LC 上の様相であるならば c は F の LC 上の様相であることを意味する。また、合成の可換性より次の補題が言える。

補題 7 以下が成り立つ。

$$1. c \in F_1^\infty(C) \text{ ならば } F_2(c) \in F_1^\infty(C)$$

$$2. c \in F^\infty(C) \text{ ならば } F_1(c) \in F^\infty(C)$$

系 8 以下が成り立つ。

$$(C - F_1^\infty(C)) \cap (C - F_2^\infty(C)) \subseteq (C - F^\infty(C))$$

上記の系より様相 c が F_1, F_2 上の LC 上になれば、 F の LC を構成する様相にはなりえないことを表す。

次に各遷移関数に対する周期と、合成した遷移関数の周期に関して考察する。

補題 9 ある $c \in C$ に対して、 $c = F_1^{n_1}(c) = F_2^{n_2}(c)$ なる整数 $n_1, n_2 > 0$ が存在するならば $c = F^{LCM(n_1, n_2)}(c)$ である。

以下の議論において、 $c \in F_1^\infty(C) \cap F_2^\infty(C)$ とし、 $C_1 = \{F_1^t(c) | t \geq 0\}$ 、 $C_2 = \{F_2^t(c) | t \geq 0\}$ 、とする。また、 $\#C_1 = n_1$ 、 $\#C_2 = n_2$ 、 $\#(C_1 \cap C_2) = m$ とする。

補題 10 $m|n_1$ かつ $m|n_2$ である。

証明 同じ方法で証明できることから $m|n_1$ のみ証明する。 $m|n_1$ と仮定する。このとき、 $t = \min\{t' > 0 | F_1^{t'}(c) \in C_2\}$ とする。 $c \in C_2, F_1^t(c) \in C_2$ を満たす。また、 $1 < t' < t$ に対して $F_1^{t'}(c) \notin C_2$ である。このとき、 $F_1^{s'}(c) \in C_2$ であり、 $F_1^{s+s'}(c) \in C_2 \wedge F_1^{s+t'}(c) \notin C_2$ ($1 \geq t' < s'$) $\wedge t \neq s'$ を満たす $s > 0, s' > 0$ が存在する。ここである k に対し、 $c = (F_2^k F_1^s)(c)$ とする。このとき

1. $t > s'$ ならば、

$$\begin{aligned} C_2 &\not\ni F_1^{s'}(c) \\ &= F_1^{s'}(F_2^k F_1^s)(c) \\ &= F_2^k(F_1^{s+s'}(c)) \end{aligned}$$

ここで $F_1^{s+s'}(c) \in C_2$ より、矛盾する。

2. $t < s'$ のときも同様に矛盾が導ける。

ゆえに $m|n_1$ である。 □

系 11 $F_1^{\frac{n_1}{m}}(C_2) = C_2$ であり $F_2^{\frac{n_2}{m}}(C_1) = C_1$ である。また、 $0 < t < \frac{n_1}{m}$ に対し、 $F_1^t(C_2) \neq C_2$ であり、 $0 < t < \frac{n_2}{m}$ に対し、 $F_2^t(C_1) \neq C_1$ である。

定理 12 $C_1 \cap C_2 = \{c\}$ ならば

$$\min\{t | t > 0, c = F^t(c)\} = LCM(n_1, n_2)$$

である。

証明 $c = F^{LCM(n_1, n_2)}(c)$ は明らかである。 $C_1 \cap C_2 = \{c\}$ より n_1/t なる $t > 0$ に対して、 $C_1 \neq F_2^t(C_1)$ であるので、 $c \neq F^t(c)$ ($1 \leq t < LCM(n_1, n_2)$) となる。よって $\min\{t > 0 | c = F^t(c)\} = LCM(n_1, n_2)$ である。 □

定理 13 $\#(C_1 \cap C_2) = m > 1$ とし、 $t = \min\{t' > 0 | F_1^{\frac{n_1}{m}}(c) = F_2^{\frac{n_2}{m}t'}(c)\}$ とする。このとき

$$\min\{i | F^i(c) = c\} = LCM\left(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2\right) \times \frac{n_1}{(n_1 + n_2 t)}$$

である。

証明 $F^{\frac{n_1}{m}}(c) = F_2^{\frac{n_1}{m}}(F_1^{\frac{n_1}{m}}(c)) = F_2^{\frac{n_1 + n_2 t}{m}}(c)$ より

$$\begin{aligned} &= F^{LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) \times \frac{n_1}{(n_1 + n_2 t)}}(c) \\ &= F^{LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) \times \frac{n_1}{n_1 + n_2 t} \times \frac{n_1}{m}}(c) \\ &= F_2^{LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2)}(c) \\ &= c \end{aligned}$$

となる。また、 $F^k(c) = c$ 、かつ $0 < k < LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) \times \frac{n_1}{(n_1 + n_2 t)}$ となる k が存在したと仮定する。系 11 より k は $\frac{n_1}{m}$ の倍数でなければならないので、 $k = \frac{n_1}{m}h$ と置くと、

$$c = F^{\frac{n_1}{m}h} = F_2^{\frac{n_1 + n_2 t}{m}h}(c)$$

となり、 $\frac{n_1 + n_2 t}{m}h$ は n_2 の倍数でなければならない。ゆえに、 $LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) < \frac{n_1 + n_2 t}{m}h$ 、すなわち、 $LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) \times \frac{n_1}{(n_1 + n_2 t)} < \frac{n_1}{m}h = k$ となり仮定に矛盾する。よって、 $\min\{i | F^i(c) = c\} = LCM(\frac{n_1 + n_2 t}{m}, n_2) \times \frac{n_1}{(n_1 + n_2 t)}$ である。 □

系 14 $\#C_1 = \#C_2 = n$ 、 $\#(C_1 \cap C_2) = m > 1$ であるとする。このとき、 $t = \min\{t' > 0 | F_1^{\frac{n}{m}}(c) = F_2^{\frac{n}{m}t'}(c)\}$ とすると、

$$\min\{i > 0 | F^i(c) = c\} = \frac{n}{m} \times \frac{LCM(m, t+1)}{t+1}$$

である。

4 合成 CA の挙動例

この章では周期境界を持つ 1 次元 2 状態 3 近傍セルオートマトンの合成によって出来るセルオートマトンの具体的な例を紹介する。なお CA の遷移関数は Wolfram の番号付けを利用する [5]。また、各様相を 2 進数で表された数値とし、10 進数に変換することで番号付けを行う。

セルサイズが 5 のセルオートマトンに対して、合成セルオートマトンの周期長が合成前の各セルオートマトンの周期長の最小公倍数になる例を挙げる。図 1、2、3 は CA90(5)、CA240(5)、それらの合成セルオートマトンの遷移図である。 $c = 9$ に対し、 $C_1 = \{6, 9, 15\}$ 、 $C_2 = \{5, 9, 10, 18, 20\}$ であり、 $\min\{t > 0 | F^t(9) = 9\} = 15$ である。また、合成セルオートマトンの周期長が最小公倍数になる例で、非線形セルオートマトンと線形セルオートマトンの合成セルオートマトンの例を挙げる。CA15(5)、CA150(5)、それらの合成セルオートマトンが図 4、5、6 である。ここで $c = 6$ に対し、 $C_1 = \{3, 6, 7, 12, 14, 17, 19, 24, 25, 28\}$ 、 $C_2 = \{6, 9, 15\}$ であり、 $\min\{t > 0 | F^t(6) = 6\} = 30$ である。

5 終わりに

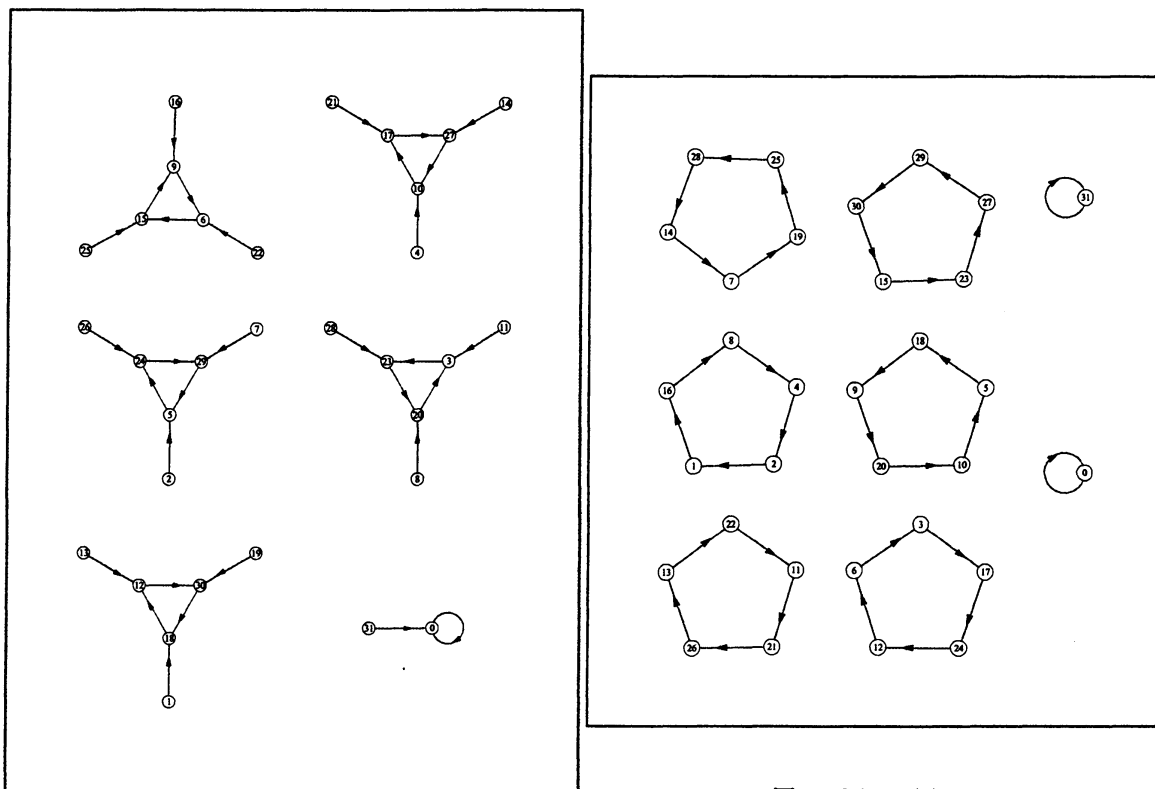
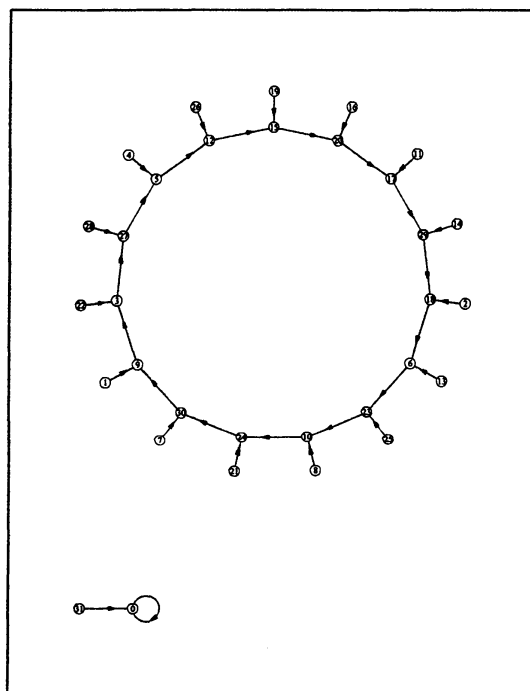
本稿ではセルオートマトンの合成において、合成が可換となるセルオートマトンと合成セルオートマトンの挙動について考察し、合成セルオートマトンの周期と合成前のセルオートマトンの挙動の関係性を示

した。また、合成セルオートマトンの例をいくつか挙げ、サイズは小さいが、合成により最大周期をもつセルオートマトンが構成できることを示した。

今後は、合成に関して可換となる為の遷移関数の組の条件のさらなる考察、基本となるセルオートマトンの挙動解析を進めることで、最大周期をもつ合成セルオートマトンの系統的な構成を目指す。

参考文献

- [1] B. Elspas, The Theory of Autonomous Linear Sequential Networks Circuit Theory, IRE Transactions on Issue Date, Volume: 6 Issue:1 ,p45 - 60(1959)
- [2] T. Ito, M. Fujio, S. Inokuchi, Y. Mizoguchi, Composition, union and division of cellular automata on groups, Proc. of the 16th International Workshop on Cellular Automata and Discrete Complex Systems, Automata2010, p255-264 (2010)
- [3] M. Matsumoto, Simple Cellular Automata as Pseudorandom m-Sequence Generators for Bulit-In Self-Tes, ACM Transactions on Modeling and Computer Simulation, vol.8,No.1, p31-42 (1988)
- [4] 手塚 集, 伏見 正則 VLSI のテストパターンの生成, 数理解析研究所講究録, volume 820, p72-75 (1993)
- [5] S. Wolfram, Statistical Mechanics of Cellular Automata itsshape Reviews of Modern Physics. volume 55, p601-644 (1983)
- [6] 石田 俊一, 井口 修一 群上のセルオートマトンにおける遷移関数の合成とその可換性について, 応用数学合同研究集会報告集, p112-117(2011)

图 2: $CA_{240}(5)$ 图 1: $CA_{90}(5)$ 图 3: $CA_{90}(5) \times CA_{240}(5)$

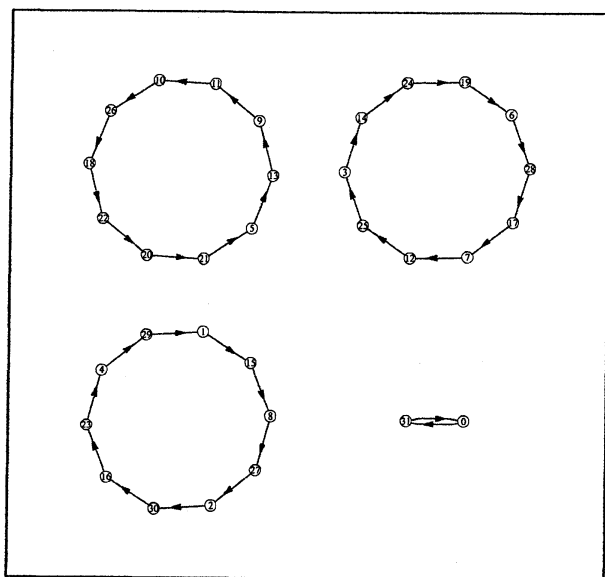


图 4: CA15(5)

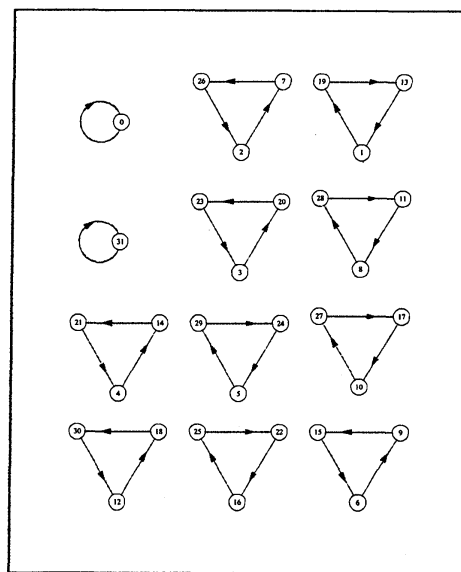


图 5: CA150(5)

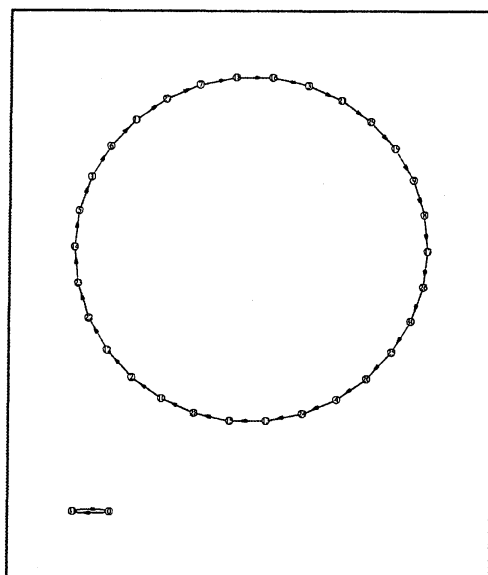


图 6: CA15(5) $\times$ CA150(5)